「木には希望がある」イザヤ書１０章３３～１１章４節

細井　茂徳

私共の属する日本基督教団では、８月の第一聖日を特別な思いで平和を願い･祈り･思いを新たにする日として「平和聖日」と定めています。今朝は、ヨブ記１４章とイザヤ書１０、１１章の御言葉から、平和について思いを馳せてまいりたいと思います。

常に他国との争いや侵略といった厳しい歴史と通ってきたヘブライ人にとって、これらの聖書箇所に出てくる「木」のイメージはとりわけ重要なものがありました。一方で、その切り倒される様子は人間の傲慢さに対する批判――特に王や為政者･指導者たちへの弾劾を示すものでした。その一方で、木は生命の象徴でもあり、中でも切り倒された後に残る「切り株」からの芽生えは、再生を思い描かせる希望の象徴でもありました。イザヤという人は、神に背いたイスラエルに対する神の裁きは徹底して行われるが、しかしその後に切り株が残され、そこからもう一度ひこばえが芽生えてくる可能性が秘められている。そうした再生の徴をかすかに見い出し、それを宣べ伝えるために用いられた預言者でした。何故に、そのようなことがなし得たのか？ イザヤは、神の前において自己の決定的な死を経験した人であったからでした。それゆえ、自分の属するイスラエルの民の滅亡をも、自分自身の事柄として語り得たのです。それだけでなく、彼自身の“罪の赦しの体験”があった、それもその赦しは揺るぎない確固とした事柄でした。だから、自らをも含めた民族の罪とその赦しとを比喩的に【切り株が残る】と、そう語り得たのでした。１１章初めにある《メシア預言》においては、将来を見晴るかす預言をしています。そして実にイザヤの時代から約八百年後に、人が思いもよらなかった方法で、死と再生をもたらす出来事が実現されたのでした。私たちキリスト者にとって、「木」にはこのメシア預言に照らされた信仰の根幹が象徴されています。ガラテヤ書３章１３節、ここに神の御業が、新しい芽・命がもたらされたのです。

私たちも、イザヤのように、それぞれ平和の福音を伝える役割を神さまから与えられています。しっかりと地中に信仰の根を張りながら、生活の只中で、平和の使者として用いられてまいりたいと願います。